資料5

新たな家畜改良増殖目標の検討における国民からの意見・要望

注：家畜改良以外の意見・要望については含まれていない。

	性別	年代	都道府県	職業	畜種	区分	意見等
1	男性	60代	広島県	その他	乳用牛	飼料利用性 生涯生産性 飼養管理	これまでの乳用牛は乳量、乳質に重点をおいて改良を進めた結果、飼育管理が難しく、個体の事故も多く、結果として飼育年数も短くなってきた。生産コストの低減がまず第一である。このためには、輸入飼料に依存する濃厚飼料多給型から、粗飼料主体のゆったりとした飼い方に転換すべきである。これ以上の改良は必要ないし、日本にあった飼養形態を普及すべきである。
2	男性	60代	広島県	その他	乳用牛	長命連産性 生涯生産性	これまでの家畜改良は、家畜の長命化を余り重視してこなかったのではないか。よく言われるF1レーシングカーを作り、その操作技術がついていかず事故ばかりとなる。本当の経済性は、個々の繁殖牛、搾乳牛を長期間飼育できることではないか。身体の強い、耐久力に優れた牛づくりが必要ではないか。質重視の改良は、もうこの辺でよいのでは。貴重な資源を大切にする改良が必要である。
3	女性	40代	大阪府	会社員	鶏	動物福祉	生産性だけではなく、動物福祉に配慮した家畜改良をするべき。生産性を求めた遺伝的選抜は、畜産動物に過度な負担を強いる結果となっている。ブロイラーは、急激に成長するよう改良されており、突然死症候群は成長率が高いブロイラーほど多いことがわかっている。イギリスの研究では、ブロイラーの30%近くは体を支えることが難しく歩行困難となり、3%はほとんど歩行不能となっているとのことである。採卵用鶏は、本来なら1年間に20個程度の産卵を300個にまで人為淘汰によって増やされている。こういった、少量の餌でたくさんの卵を産ませるために行われてきた遺伝的選抜は、鶏の骨をもろくしてしまった。自らに必要なカルシウムも卵のとして輩出され、と殺のための出荷前の捕鳥作業時、輸送のときに骨折しやすいことが知られている。
4	女性	40代	大阪府	会社員	牛・豚	改良手法	人工授精から自然交配への転換を。 人工授精は、技術の未熟さや不注意による生殖器病を起こす可能性がある。注入器を膣内にいれ、人の腕を直腸から奥深くに挿入して行う人工授精は、動物の自然な姿からはかけ離れたものであるだけではなく、100万～200万頭の牛を2000頭ほどの種牛の精子で受精させていくというやり方は、遺伝的多様性を減少させることにもつながる。年々人工授精成功率が下がっていることとも、これと無関係とはいえないのではないだろうか。人工授精から自然交配の繁殖に切り替えていくべきである
5	女性	40代	大阪府	会社員	全畜種（特に豚、鶏）	飼養管理 動物福祉	生産性を向上するために、暑熱対策、良質な飼料や水の給与等の飼養管理のみではなく、動物の本来の習性が発揮できる環境づくりに取り組むべき。疫学研究によれば、広々とした空間で少ない羽数で飼育されると、採卵用鶏は多く産卵し、死亡率が低くなることが分かっている。また、群飼や輸送回避といったストレスフリーで育った豚は、体重が増えることが分かっている。群飼は動物同士のけんかが多くなるともいわれるが、たとえば豚の隠れ場所を用意することで豚同士のけんかは減るし、鶏に止まり木を与えることで攻撃性を減らすことができる。
6	女性	40代	大阪府	会社員	馬	改良全般	競走馬はあまりにも大きな負担を強いられており、これ以上の改良に歯止めをかける必要べき。 競走馬は「速く走る」ことに特化した交配と淘汰の結果、体重に対する足の太さが限界まで細くなってしまっていると言われている。細い4本の脚で400～500kgの体重を支えるには負担が大きく、骨折しやすい。骨折すると、残りの3本の足で体重を支えることができず、多くは殺処分されてしまう。競走馬としての調教の過程の負担も大きく、中央競馬では毎年1000頭の馬が「ソエ」（骨が出来上がっていない成長期の若い馬に、限度を超える調教を行うことで発症する病気。強い痛み、跛行、重度になると亀裂骨折する ）を発症している。 またJRA研究所によると競走馬の8割が胃潰瘍になっているという。競馬人口は減ってきており、現在の競走馬の負担の大きさを考えると、畜産振興の一環としての競馬そのものを見直す必要があると考える。

	性別	年代	都道府県	職業	畜種	区分	意見等
7	女性	40代	大阪府	会社員	乳用牛	乳量	乳牛改良の目的を、乳量増加に置くべきではないと考える。 肉牛であまり見られない乳牛の産後の起立不能はカルシウム不足が主要原因といわれているが、乳量増加に着目した改良が、カルシウム不足の要因と考えられないだろうか。年々乳牛1頭あたりの乳量は増加しているが、たくさん乳を出すということはたくさんのカルシウムを排出するということであり、乳牛の産後の起立不能は、乳牛の高泌乳量と無関係ではないはずだ。高泌乳牛は病気にかかり易いとはよく言われることであり、第四胃変位も高泌乳牛群に多い傾向があり、その発生率は 3～15%に及んでいる（2008年 日産合成工業株式会社 学術・開発部資料）。すでに日本の乳牛1頭当たりの乳量は世界トップクラス（約8000kg）であり、EUの平均（6669kg）と比較しても高いのである。これ以上の乳量を重視した改良には歯止めをかけるべきと考える。
8	男性	30代	東京	マスコミ	肉用牛	改良手法 種雄牛	肉用牛の種雄牛造成について意見を述べさせていただきます。 現場の農家さんを回って「どういう種雄牛が欲しいか」と聞くと、大抵「ハーフや三元交配の種雄牛はもういらない。藤良と気高の純系が欲しい」という答えが帰ってきます。理由は主に2つです。 1つはハーフや三元交配型の種雄牛産子は子牛の特徴や発育、枝肉成績や作りがバラつくこと、もう1つは繁殖農家で使用されている雌牛はコマーシャル牛の生産用なので三元交配・四元交配の牛が多いなか、それにハーフや三元交配型の種雄牛を交配すると近親交配になって近交係数が高くなってしまい、それを避けようとすると交配の選択肢が狭まってしまうためです（もちろん、そんなことは先刻承知だとは思いますが）。 民間や各県では育種価の高い雌に流行の種雄牛を交配したハーフや三元交配型種雄牛が大勢を占めています。それが現場で交配の幅を狭めているわけですが、それに対しては国がいろいろ意見を述べることが難しいと思います。しかし、家畜改良センターにおける種雄牛造成に対しては意見を述べられると思いますので、ぜひ改良センターで藤良と気高の純系を造成するよう指導をお願いします。 家畜改良事業団の種雄牛や候補牛を見てみると十勝牧場や宮崎牧場産の牛は、せっかく母体が純系なのに父が母体と違う系統のハーフの場合が多く見られ、もったいないと思っています。鳥取牧場は兵庫系（田尻系）の純系種雄牛の造成に特化した結果、非常に優秀な種雄牛を毎年送り出し、和牛農家に貢献しています。ですから十勝牧場と宮崎牧嬢においては、5代純系は難しいと思いますが、せめて3代純系で藤良・気高（できれば菊美・熊波・栄光も）の種雄牛を造成することに特化していただければと思います。これこそ民間や県ではできない、改良センターだからこそできる種畜造成だと考えています。 もし、田尻・藤良・気高の純系種雄牛が複数揃えば、生産者は近親交配を気にすることなく雑種強勢を期待した輪番交配が可能になります。またそうした交配ができれば、近交退化を防ぐことになるので治療費の削減にもつながると思います。 それともう1つは系統の分類の仕方についてです。現在は種雄牛を父系によって分類をしていますが、これはいかがなものでしょうか？例えば事業団の美津百合のように4代祖までに出てくる8頭の種雄牛のうち気高系は2頭しかいないくて、他は兵庫系が6頭（田尻系4頭・熊波系2頭）という血統構成なのに、現状ですと分類上は気高系になります。しかし、本牛や枝肉成績を見ると、気高系の特徴ではなく兵庫系の特徴が強く出ている印象です。これはやはり生産者に混乱をもたらしていると思いますので、分類の仕方をもう少しどうにかできないでしょうか？「平茂勝みたいに強健で大きな牛を期待して茂勝栄を付けたけど、生まれてきた子牛は兵庫系みたいに小さくて体質が弱く困った」という話しもよく聞きました。純系で種雄牛造成を行えばこうしたことは少なくなると思いますが、民間ではなかなかそういう種雄牛造成は進みそうにないので、こうしたことを防ぐためにも系統分類の再考もご検討くださいますよう、よろしくお願いいたします。